

## 松下幸之助の「職業奉仕観」

私がガバナーエレクトのときの地区研修協議会などでも紹介した松下幸之助氏（大阪RC 1894～1989）の「職業奉仕観」についての論稿を、今回改めて読み返してみた。「ロータリーの友」1970年1月号の巻頭言（5頁にわたる論稿）である。

当時、経営の神様と言われた松下氏を間近で一目見たくて、全国から多くのロータリアンが大阪RCの例会にメイクに行ったという。そうすると、熱心なロータリアンであった松下氏は、自らゲストに近づき、「松下幸之助と申します」と言って名刺交換をしてくれたそうで、メイクに行ったロータリアンはみんな狂喜乱舞したという。

そんな経営の神様が「職業奉仕」について語った論稿の要旨を以下紹介する。

二つのポイントがある。その一つは「職業観」についてであり、松下氏は次のように述べる。「ただなんとなく、自分の職業を通じて社会に奉仕するというようなことでは、もうひとつかよわい。天下の金、天下の人、天下の土地を擁して事業を営んでいるのだから、自分の職業は社会にやらせてもらっているのだ、言い換えれば、社会に奉仕することによってのみ存在し得るのであり、そうでなければこの仕事は全く存在価値がないのだ、という認識をしっかりと持たなくてはならない」と。

二つめは「利益についての正しい見方」ということであり、松下氏は次のように述べる。「いくら企業の社会的責任を唱え、社会に奉仕貢献するといってみても適正利潤がなかったら、それも空念仏に終わってしまう。企業は、適正価格で提供するために、創意工夫をこらして研究開発につとめ、一方では紙1枚、電話1本も節約するなど、骨身を削るような思いで苦心努力しているのである。そういう努力の成果が、幸い社会を益し、世の人びとの受け入れるところとなった。そこで、その報酬として社会から与えられるのが適正利潤というものなのだ。そういう観点からすれば、利潤というものは一面において企業が社会にいかん貢献したか、つまりどの程度職業奉仕をしたかを示すバロメーターだといえる」と。

さすが経営の神様。目の付け所が違う。本当に迫力と説得力のある文章です。

一つめのポイントの「職業観」、具体的には「自分の職業を通じて社会に奉仕する」ことについて、その認識の厳しさを求めています。

二つめのポイントの「利益についての正しい見方」についても、「企業の社会性ということから、企業の利潤を軽視する、これは社会性に相反するものと考え、そのような風潮が社会の一部に見られるように思う。なるべく薄利で売って儲けないことが社会性に合致するという論調である」と指摘して、しかし、それは全くの誤解であり、間違いであると反論し、「利益についての正しい見方」をすべきで、それをもとに職業奉仕を考えてみるべきだと力説するのである。

「職業を通じて社会に奉仕する」ということの意味について、松下氏の二つのポイントを噛みしめながらもう一度考え直してみたいものです。